

教授に就任して

教授就任のご挨拶

口腔生命科学系列・教授
(口腔生命福祉学科) 小野和宏
(口腔衛生支援学講座)



平成17年4月1日付けで、新潟大学歯学部 口腔生命福祉学科 口腔衛生支援学講座 教授を拝命いたしました。この場をお借りして、ご挨拶申し上げます。

既にご存じのことと思いますが、新潟大学歯学部は、要介護者や障害者、さらにその家族が、真に必要なサービスを提供するために、口腔ケア、摂食・嚥下に関する高度な専門知識を有し、保健・医療・福祉を総合的に考え、実践できる専門家を養成することを目的として、平成16年4月に口腔生命福祉学科を新設いたしました。この新学科は、歯科衛生士教育としての初の4年制大学課程、社会福祉士教育との統合、PBL(Problem-Based Learning: 問題基盤型学習)の全面導入など、歯科界に新しい流れを起こすものと確信しており、その一翼を担うことを誇りに思うと同時に、責任の重さを痛感しています。

私は、平成15年8月から平成16年1月までの半年間、文部科学省在外研究員として、スウェーデン王国のマルメ大学歯学部にて、PBLによる歯

学教育プログラムの調査・研究を行いました。帰国後、歯学部長ならびに副学部長始め多くの教職員の支援のもと、平成16年4月より歯学科5年次の授業にPBLを導入しています。その関係もあり、今年から、特に、口腔生命福祉学科のカリキュラム・プランニングならびにその実践のお手伝いをさせていただくことになったものと承っています。なお、PBLとは、患者様の事例の中から問題を見つけ出し、その問題を手掛りに、少人数のグループで自主的に学習を進めていく学習方法ですが、その詳細については、歯学部ニュース平成16年度第1号(通算104号)13-14頁「口腔生命福祉学科の専門教育について—PBLの目的と導入の経緯—」、歯学部ニュース平成16年度第2号(通算106号)1-6頁「教科課程編成とPBL」、新潟大学歯学部同窓会誌第24号53-54頁「スウェーデン・マルメ大学歯学部に出張中です」をご参照いただければ幸いです。

口腔生命福祉学科では、保健・医療・福祉に関する深い理解と専門的知識に基づき、これらを総合的に思考・展開できる指導的人材を養成するために、4つの教育目標を掲げています。すなわち、①オーラルヘルスプロモーションを理解し、展開できる(オーラルヘルスプロモーション)、②全人的保健・医療・福祉を提供できる(全人的態度)、③自発的な生涯学習を行うことができる(生涯学習)、④チームワークに基づく効果的な業務が行える(チームワーク)というものです。PBLは認知心理学を科学的基盤とする教育技法であり、統合

された深い知識理解の習得、問題分析・解決能力の獲得、対人関係能力の育成、継続的学習意欲の養成などの効果を有しており、先に述べましたが、口腔生命福祉学科では、学生たちがこれらの教育目標に到達できるようPBLを基礎としたカリキュラム編成を行っています。また、入学早期より患者診療やクライアントへの接触の機会を提供し、人間性豊かな医療人としての成長を促しています。幸いにも学生たちの向学心は高く、現在の

ところ、口腔生命福祉学科設置の目的をよく理解し、これまでと違った新しい学習法と格闘しながら、大学生活を謳歌してくれているようです。

口腔生命福祉学科を担当させていただき、まだ1年も経っておらず、なにかと至らない点も多いとは思いますが、微力ながら全力を尽くす所存ですので、今後とも一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。





口腔生命福祉学科教授に就任して

—A rolling stone gathers no moss, but....—

口腔生命科学系列・教授
(口腔生命福祉学科)
(福祉学講座)

大内章嗣

2005年4月1日付けで歯学部口腔生命福祉学科福祉学講座教授を拝命致しました。全国の歯科大学・歯学部のなかでも常に時代をリードしている新潟大学歯学部教授陣の一員に加えて頂きましたことを大変光栄に感じ感謝申し上げますと共に、新潟大学歯学部のみならず歯科界全体、保健医療福祉の世界にとっても大きな転換点となる可能性を秘めた口腔生命福祉学科を担当させて頂くことに身の引き締まる思いです。

私が新潟大学歯学部にお世話になる契機となったのは2001年4月に厚生労働省と大学間の人事交流の一環として、歯学部附属病院（当時）講師として赴任したことでした。以来、すでに5年近くが経過していることになり、あらためて時の流れの速さに驚いています。「たかが5年じゃないか。」と言う声が聞こえてきそうですが、私は日本大学歯学部を卒業して以来の16余年の間で、3年を超えて同じ職場（ないしは住所）に続けて留まった経験がありません。大学卒業後は学生時代の所属クラブの顧問でもあった斎藤毅教授（保存学教室歯内療法学講座）の下に医員として入局しました。在籍した3年弱のうち約1/3は伊豆七島の神津島や北海道根室などの僻地歯科診療所へ数ヶ月交代で派遣されており、残りの期間は東京近郊を中心とした企業・病院などの出張先でバイトに精を出すという生活でした。今思うとこの当時の生活がその後の私の流転人生の原点であり、また、結果的にそれに耐えられる基礎体力を養うことになっていたのかもしれませんが。

1992年3月からは講座の派遣先の一つである厚生省の歯科診療室に常勤医として勤務することとなりました。省庁の歯科診療室勤務にも慣れたその年の初冬、私の人生にとっての大きな転機が訪

れました。当時の宮武光吉歯科衛生課長が厚生省を退官されることとなり、その欠員補充としての医系（歯科）技官募集に斎藤教授の鶴の一声で私が応募することとなったのです。開業医の長男坊だったこともあり「まあ、3年やってみてから、その後については考えればいいや。行政の仕事というのも滅多に体験できるものじゃないし。」程度の動機でした。

厚生省での最初の配属先は保険局医療課医療指導監査室で（一応、省内では「平5（93年）入省組」ということになっていますが、前年から職員として歯科診療室に勤務していたために、私だけが異動辞令だったという笑い話もありました。）、泣く子もだまる（??）共同指導での全国行脚や平成6年診療報酬改定を経験させて頂きました。診療報酬改定の最後の仕上げでカンヅメになっている3月中旬に当時の石井拓男歯科医療管理官から「明日、異動内示がでるらしいから省に顔をだしたほうがいいよ」という呆然とするようなお言葉を頂き（診療報酬改定を担当すると後始末が一段落する夏頃まで異動は無いという不文律がありました。）、1994年4月から秋田県庁初の歯科医師として福祉保健部保健衛生課に3年間お世話になりました。秋田県では歯科保健だけでなく、地域保健法施行に伴う市町村への保健関係業務の委譲、秋田市の中核市化に伴う保健所の移管と移転など本当に幅広い地域保健行政の経験をさせていただきました。それまでヘルスについて全く経験のない私でしたが、県庁や歯科医師会等の皆さんから本当に親身にご支援いただき、忙しいながらも良い思い出となる3年間でした。

1997年4月に厚生省に戻ると健康政策局歯科衛生課（現在の医政局歯科保健課）に配属され、歯

科医師需給検討会、歯科衛生士の養成のあり方等検討会等に関わらせて頂きました。1998年の秋からは健康日本21の策定作業のために保健医療局地域保健・健康増進栄養課（現在の健康局総務課）兼務となり、1999年12月からは保健医療局初の歯科医師として正式に異動することとなりました。結局、健康日本21については作業の最初から最後まで関わった唯一の医系技官として、「歯の健康」分野だけでなく、全体の取りまとめも担当させて頂きました。この時に癌、循環器疾患、糖尿病や栄養分野などの第一線の研究者・行政担当者の方々と一緒に仕事をさせて頂いたことは私の大きな財産となりました。また、所属課が地域保健、保健所を所管しており、当時、和歌山毒カレー事件や有珠山、三宅島の噴火など健康危機事例が頻発したため、泊まり込んでその対応に追われたこともありました。この経験が新潟県中越地震の際に歯科医療救護活動のお手伝いをさせて頂いた時に多少なりとも役立ったのかもしれない。

先に述べましたように、2001年4月から厚生労働省との人事交流ということで新潟大学に参りましたが、厚労省と大学の交流はその前年から東京医科歯科大学との間で始まっていました。実は私も当時の瀧口徹歯科保健課長から医科歯科大への派遣について打診されていたのですが、当時は健康日本21策定の追い込み時期でもあり、地域保健・健康増進栄養課長から「後始末もあるので1年待って欲しい」ということで、私の医科歯科大への派遣は立ち消えとなったのでした。人生に“もし”は無いと言いますが、今に至ると巡り合わせの不可思議さを感じずにはられません。

新潟大学歯学部での最初の3年間は教育・研究・臨床を使命とする大学教員としてはあるまじき事かもしれませんが、これら3つに直接関わるということはほとんどなく、ISO9001認証取得、医歯病の統合準備、地域保健医療推進部の立ち上げ等の、役所にいた時とほとんど変わりばえのしない企画調整・運営の仕事がほとんどでした。こ

のなかで、口腔生命福祉学科の基本構想の検討、概算要求資料や設置申請書類の作成等のお手伝いもさせて頂きました。こうしたことから、今回、教授を拝命することになった一番の理由は「きちんと立ち立てできるようになるまで、責任を持って面倒を見なさい」ということであると思っています。

口腔生命福祉学科の目的、活動の現状等についてはこれまでの歯学部ニュース等でご紹介いただいておりますので、ここで再度述べることはいたしません。新学科は社会全体に対する歯科保健医療の関わり・位置づけ、そして歯学・歯科医療自身の基本的スタンスを転換していける可能性を秘めていると思っています。そうした考えの根本となっているのが、今回ご紹介させて頂きました私の一風変わった経歴のなかで培われてきた「歯科はもっと社会に貢献できるし、(皆が表面的に認識していないだけで)求められてもいる」という確信です。

学科教員一同、学年進行に伴うカリキュラムのプランニングと実施、そして2年後に迫った学生の就職支援や大学院(修士課程)の準備など、日々の課題に忙殺されている毎日ではありますが、優れた将来展望と理念のもとに設置された口腔生命福祉学科がその可能性の芽を大きく花開かせることができるよう、常に初心を忘れてはならないと自戒しているところです。

「転石苔を生ぜず」とは言われますが、これまで私がお世話になった各地・各所でまがりなりにも仕事をしてこれたのは、それぞれの場所で素晴らしい人々に巡り会い、一緒に仕事をさせて頂くなかで、本当に貴重な経験・有形無形の財産を頂戴してきたからこそだと痛感しています。

ようやくよちよち歩きを始めたばかりの口腔生命福祉学科ともども、引き続き皆様からのご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。教授就任のご挨拶とさせて頂きます。



教授就任にあたって

新潟大学 超域研究機構・教授 網塚 憲生

平成17年9月1日付けで新潟大学 超域研究機構の教授に就任致しました。今後とも、何卒、宜しくお願い申し上げます。

「超域研究機構」は、平成15年度から歯学部、医学部、工学部、理学部あるいは農学部と言った従来の学部にとらわれない分野横断型研究組織として設置されています。私は、その第一期に当たる「先天性骨格疾患における分子病理学的解明と組織機能再建」のプロジェクトリーダーとして務めて参りましたが、今回、このような機会を与えられ、さらに一層の努力をして参りたいと思いますので宜しくお願い致します。

超域研究機構とは聞き慣れない言葉でもあり、また、機構的には本部に属しますので、多くの先生から「五十嵐に移ったのですか？」と聞かれます。実はそうではなく、昨年暮れに、歯学部共通実験施設のプロジェクト研究実験室を改装し、教授室と教室を兼ねた部屋をつくりました。小さな部屋ですが、明るく居心地が良いよう、また、仕事が能率的に上がるよう工夫してあります。一つの部屋に教授室、教室、秘書室を兼ねないといけないので、年末の忙しい時期に部屋の寸法を測り設計図を書いて、なんとか2006年のお正月までに間に合わせた感があります。大きな声では言えませんが、共同研究や教科書の締め切り、海外の教科書の和訳など締め切りに追われていた時期に、部屋の設計に没頭するのも悪くないと感じたのは、私の気まぐれな性分のせいでしょうか。

我々の構成メンバーとしては、超域研究機構の分担研究者である李 敏啓先生（日本学術振興会・外国人特別研究員）、そして、昨年の12月から来てくれている秘書（事務補佐員）の市村千尋さんに新メンバーとして活躍してもらっています。

李先生は、骨組織解析のエキスパートとして信頼の厚い人ですし、市村さんは機転の利く有能な秘書さんです。ところで、歯学部の授業および大学院指導も引き続き行っており、現時点（2006年1月）で、各臨床からの大学院生として中館正芳君、小島 拓君、Paulo Henrique 君、Ubaidus Sobham 君が口腔解剖学分野（前田健康教授）との共同指導という形で来てくれています。彼らの私に対する評価を聞いてみると、面倒を良く見ってくれるけど厳しいそうです。確かに、彼らはレベルの高い要求に良く応えてくれており、財産は人だなとつくづく思います。

また、カナダ、米国など海外との共同研究も行っている一方、「先天性骨格疾患における分子病理学的解明と組織機能再建」のプロジェクトに関する内容を各大学の先生方と展開しています。特に力を入れている「骨質：bone quality」は臨床サイドからの強い要望に端を発し、国内だけでなく世界的にも大きな流れとなっています。現在、長崎大学、慶應義塾大学、大阪大学、東京慈恵会医科大学、長寿医療研究センターと「骨質研究会」を作り、「骨量」から「骨質」重視への医療研究を進めているところです。今では広く知られるようになった骨粗鬆症を始めとして、ステロイド性骨粗鬆症、腎性骨異常栄養症(ROD)、歯科医療などの骨再生としてのバイオマテリアルの応用、また、各治療薬投与における骨質評価を様々な観点から行っており、このような研究・臨床成果に対する要望は今後も続くと思われまます。

さて、経歴のご紹介が後手になってしまいましたが、私は18期生として新潟大学歯学部に入學し、1988年に卒業、1992年に歯学博士を修得しました。学部生時代には、旧口腔解剖学第一講座（小澤英

浩教授、現在 松本歯科大学学長)のご厚意で電子顕微鏡などを使わせて戴き、歯や骨の組織を写真に撮りそれを歯学祭に展示した思い出があります。1992年に大学院を修了し、助手に任命後、同年11月にカナダ、モントリオールにある McGill 大学に留学しました。実は、それまで海外に出た経験が無かったのと、骨代謝では有名な David Goltzman 教授でしたので緊張しましたが、Goltzman 先生には好意的に受け入れて戴いたせいか、カナダでの生活には直ぐに慣れ親しむことができました。10年たった今でも、McGill 大学の仲間とは現在も共同研究をしているばかりでなく、ラボで知り合った友人とも故郷の話をしたり、モントリオールの街を楽しんだり、一人一人の顔をしっかりと思い出すことが出来ます。留学に関しては、楽しい思い出をされてきた方々が多いと思いますので、是非、若い先生方にお勧めです。私のカナダ留学は2年半で終わり、1995年に帰国後、そのまま助手として授業や研究に従事しました。小澤教授のご退官に伴い、口腔解剖学分野(前田健康教授)の助教授として5年間お世話になった後、このたび、超域研究機構に就任するに至っております。私は、小澤先生および前田先生の時代を通して、大学を取り巻く情勢の中で力強く進んでゆく意志と努力を学ばせて戴いたと思っております。

このたび、超域研究機構という研究に特化した立場になりましたが、研究を進めるうえで、骨代謝をより良く理解できるための研究、また、それが臨床に反映される研究を目指したいと思っております。上述しました「骨質: bone quality」は、再生医療・医学が進む上で、我々はどのような骨を再生してゆくべきか、各バイオマテリアルの特性をどのように応用してゆくか、さらに QOL や医療費に至るまで、「骨質」は国内だけでなく世界的にも大きな流れとなっています。歯科医療におきましても、骨は様々な面で関わりのある組織でもあり、第一線でご活躍されている基礎研究、臨床医の先生方のご意見・ご経験を拝聴させて頂ければ幸甚に存じます。また、学生さんは将来を担う大切な存在であり、勿論、学部の授業や実習はしっかりと修得してほしいと思っておりますが、その一方で、広い視野を持って果敢に挑戦するチャレンジ精神を持ってくれることを期待しています。我々が、そのような学生さんに少しでもチャンスを提供できればこれほど嬉しいことはありません。

新しく立ち上がったばかりの研究機構ですが、一歩一歩、前進するよう努めて参りたいと存じますので、皆様方のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



前列左から 李 敏啓先生、網塚憲生(本人)、市村千尋さん、
後列左から Paulo Henrique 君、Ubaidus Sobham 君、
中舘正芳君、小島 拓君